

# 読書通信

第14号  
発行人: amagata

## 百花繚乱、戦後文学を読む

第二次世界大戦によって、日本国土は焼け野原になってしまった。負けるはずはないと思っていった神国日本は負け、日本国民の頭の中は空っぽになってしまった。廃墟と化した日本、抜け殻になった日本国民、その一助となったのは文学であった。戦時下、弾圧・抑圧・制御されていた創作エネルギーは、終戦を迎えることで融解し、或いは爆発し、文学作品として表出した。その作家たちの解放のエネルギーはどのような作品となって結実したのか。戦後に発表された作品を読んでみよう。

### \* 既成作家として、

志賀直哉「灰色の月」  
谷崎潤一郎「細雪」  
永井荷風「踊子」  
川端康成「山の音」など

### \* 新世代へ無頼派

坂口安吾「墮落論」「白痴」  
太宰治「斜陽」「人間失格」  
織田作之助「夫婦善哉」  
伊藤整「小説の方法」

### \* 新世代へ戦後派

野間宏「暗い絵」「真空地帯」  
埴谷雄高「死霊」  
椎名麟三「深夜の酒宴」  
大岡昇平「俘虜記」「野火」  
三島由紀夫「仮面の告白」  
「金閣寺」  
安部公房「壁」「砂の女」  
堀田善衛「広場の孤独」など

### ▽坂口安吾「墮落論」

敗戦直後、未曾有の国土荒廃と価値観の崩壊に直面していた日本人たちに強烈な衝撃を与えたエッセイ。

「日本は負け、そして武士道は亡びたが、墮落という真実の母胎によって始めて人間が誕生したのだ。生きよ、堕ちよ、その正当な手順のほかに、真に人間を救い得る便利な近道がありうるだろうか。」

(中略)

「人間は変わりはない。ただ人間へ戻ってきたのだ。人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない。人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の人間を救う便利な近道はない。」

### ▽太宰治「人間失格」

文学史上最もモテた作家太宰治。4度の自殺未遂の後、玉川上水にて心中。その直前に書かれた作品。主人公は大庭葉藏。これは初期作品「道化の華」の主人公と同名。

「恥の多い生涯を送って来ました。」で始まる手記は、「いまは自分には、幸福も不幸もありません。ただ、一さいは過ぎて行きます。」で終わる。

「この作品は、ある性格を持つて生れた人々の、弱き美しきかなしき純粹な魂を持った人々の永遠の代弁者であり、救いであるのだ。太宰治は『人間失格』一編を書くため生れて来た文学者であり、この一編の小説により、永遠に人々の心の中に生き残るであろう。」(奥野健男)



### ▽椎名麟三「深夜の酒宴」

いまも鬱になったとき、読みたくなる、ぼくにとっては必要不可欠な小説。こんな小説が一冊あると実に助かります。短編で、すぐ読めます。詳細は「読書通信 第2号」で。

### ▽三島由紀夫「金閣寺」

幼い頃より、「金閣寺の美」にあこがれを持ち続けていた学僧。「美」金閣」との一体化を図り、金閣寺に放火したが、「美」金閣」から疎外される物語。実際にあった「金閣寺放火事件」を題材にして書かれた作品。他にもこの事件を題材にした水上勉「五番町夕霧楼」「金閣炎上」がある。

### 《冒頭と結び》

幼時から父は、私によく、金閣のことを語った。  
私の生れたのは、舞鶴から東北の、日本海へ突き出たつらさびしい岬である。

(中略)

別のポケットの煙草が手に触れた。私は煙草を喫んだ。一ト仕事を終えて一服している人がよくそう思うように、生きようと私は思った。



### ▽安部公房「砂の女」

砂丘に昆虫採集に出かけた男が、砂穴の底に埋もれていく一軒家に閉じ込められる。考えつく限りの方法で脱出を

試みる男。家を守るために、男を穴の中にひきとめておこうとする女。そして、穴の上から男の逃亡を妨害し、二人の生活を眺める部落の人々。ドキユメンタルな手法、サスペンスあふれる展開のなかに人間存在の象徴的姿を追求した書下ろし長編。20数力国語に翻訳された名作。(新潮文庫裏表紙より)



### 後記

大学時代、金閣寺は下宿から歩いて行ける距離だったの、朝目を覚まし、雪が積もっている、と、「雪の金閣寺」を見に行きました。雪に覆われ、凍としたその佇まいは異次元の美しさでした。1987年、「昭和大修復」で金閣寺は輝きを増しました。けれども、リニューアルされた金閣寺にはまだ行っていません。いまでも金閣寺は京都観光の目玉であり、美の象徴として京都北山に君臨しています。



「読書通信」  
バックナンバー